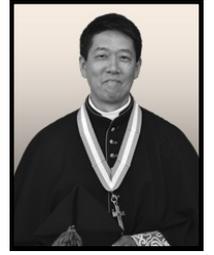




セントルイスからのたより

2013年11月



教皇フランシスは機会があるたびに、対話することの大切さを強調されます。日本ではあまり報道されませんでした。教皇は今夏、ローマを訪れた、日本の中学生達のために、特別に時間を割いてくださいました。埼玉にある文理西部学園中学校の生徒達は、8月21日の教皇との特別謁見のためにはるばると東京からローマへと巡礼しました。教皇はかつて宣教師として日本に来日しようという希望を持っていただけに、日本への愛情が深いようです。生徒達との語らいの間、教皇は生徒達に柔和の徳の大切さについて強調されました。教皇は言います、“本当の柔和さとは、人々そしてその文化に出会うことができる能力です。そして平和をみつけ、筋の通った質問、例えば、どうしてあなたは、このように考えるのですか？とかまた、どうしてこの文化においてはこのように行うのですか？とかいった問いを相手に問いかけることのできる能力です。”



また教皇は、若者達の成長にとって、対話の大切さを教えられました。対話のないところでは、人々は争いに陥る危険があります。教皇は言います、“柔和さとは、まず相手の言うことに耳を傾け、そして相手に対して思いやりを持ち、それから対話を持つことです。”昨今の世界を取り巻く状況、また日本を取り巻く状況を考えると、対話の大切さをつくづく実感させられます。まともな対話が成り立つには、お互いが誠実に対面することが欠かせません。自分の立場を一方的に守ろうとしだすと、一瞬にして対話の雰囲気は失われ、論争になってしまいます。誠実の主である神、真の神との対話がなければ、誠実であることはできません。人々がまず神との対話に立ち返ることを切に祈ります。お元気で！主と聖母の祝福が豊かにありますように。

